



【巻頭言】ピンチをチャンスに変えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 由佳利 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9452

【巻 頭 言】

ピンチをチャンスに変えて

佐 藤 由佳利

(専攻長)

2020年度は特別な年になるはずだった。オリンピック開催年だったからだ。青天の霹靂ながら、札幌でオリンピックが行われることとなり、うきうきした気持ちと、ざわざわした気持ちを抱えながら、夏季集中講義をどうするかを、講座では話し合っていた。

しかしながら、結局はCOVID-19に振り回される年になった。北海道は、全国的にも早くこの感染症が蔓延し、自粛要請が知事よりなされた。本学のサテライトがある札幌駅に行っても、ほとんどの店が閉まり、人が歩いておらず、ゴーストタウンのようになっていた。

学生たちがようやく修士論文を書き上げ、「振袖着る？ やっぱりはかまかな」などという会話が聞かれた3月、卒業式も修了式も行えないこととなった。就職のために札幌を離れる学生にはなむけの言葉を送ることさえできなかった。それでもこのころには、まだ事態を楽観視していて、「もう少し落ち着いたら、みんなで集まって、遅れたお祝いをしようね」と声をかけていたが、後期が始まる今になってもそれは実現していない。教育関係に就職した修了生は、いつまでも仕事が始まらず、在学学生も学校関係でのアルバイトが動かず、困難を極めることとなった。

本専攻には、もう一つ、大きなできごとがあった。それは長年にわたって、本専攻を牽引してくださっていた庄井良信先生が転出されたことだ。「ムーミンパパ」と学生たちが慕い、その講義の質の高さだけではなく、共にいるだけで心おだやかになるような人柄が、本専攻全体を包んでいた。残された教員も学生も、喪失感は大きく、喪の作業を兼ねて庄井先生の講演会を企画したが、これもCOVID-19が吹き飛ばした。事態が落ち着いたら、再企画しようと思っていたが、これまた実現には程遠い。

4月、新学期になり、新入生を迎えたが、入学式は行えず、どうにかガイダンスだけを短時間で対面で行った。しかし、なごやかな談笑は望むべくもなく、必要最小限のことを聞くだけで学生たちを帰宅させた。以降、しばらくの間、新入生たちは学内に入ることもなかった。

そこからはZoomの導入である。幸い、Zoomを使い慣れている教員も多く、本専攻の講義はそもそも双方向だったことから、移行はしやすかった。それでも全員がWi-fiやカメラ等を備えたパソコンを持っていたわけでもなく、また非常勤講師の中にもZoomに慣れない人や機器をもちあわせない人がいて、これらの対応にも追われた。大学からZoomのアカウントを得たり、予算の交渉をしたりと、事務的な作業も増えた。

入試説明会、入試。すべてがかつてない方法で行われ、いつもの流れ作業が、いつものようには流れていかない。やがて多少の対面授業や、修士論文のためや、臨床心理実習のために学生たちが

学内に入ることもあるようになってきたが、当初、ベースキャンパスでは学生だけで学内を歩かせないようにしていたため、付き添う教員は多い時で玄関と研究室を10往復する羽目になった。

学校は学ぶだけのところではない。本来なら今頃の時期は、学生たちは演習室にいて修論を書いている。夜遅くまで修論に没頭している。そこに立ち寄った教員がだれかれとなく声をかけたり、進捗状況を聞いたり、励ましたりする。学生同士も進捗を確認しあい、励ましあっている。それが今年は見られない。その不利益は計り知れない。

まだ関係性ができていない1年生にいたっては、通常ならすぐにできているはずのライングループもいつまでも作られなかった。「研究室に来て」と言ったら「どこですか。大学には入試とガイダンスしか行ったことがないので」と言われた。これではせっかく入試を突破して、うれしかっただろうに、院生になった実感ももてないだろう。

普通の大学院なら、何人かは学部からの直進だろうが、本専攻は独立大学院なので、学部からの直進がない。全員が、初めて会う人たちである。交流しろと言っても難しい。授業自体はつつがなく進んでいるが、こうした交流の不足が、せっかくの院生の今後に及ぼす影響は、教員として心配なところである。経済格差を学力格差にはいけない。会えない学生の情報を集め、つなぎ、不利益を被ることがないように、最大限の配慮を試みた。

しかし、悪いことばかりではない。多くの学会や研修会がオンラインになった。おかげで北海道に住む不利益が減っている。某研修会に出たら、参加者で一番多いのが北海道だった。北海道の人たちは、ここぞとばかりに研修に参加している。交通費や宿泊費なしで受けられるのだから、こんなにいいことはない。全国どころか世界中の研修会に出ることができる。全国研修会のお知らせをすると、参加する学生も多い。その意味では学外研修の機会は増えている。

実は授業もオンラインにしたおかげで、ゆっくり履修していこうと思っていたのが、全部の授業を受けられるようになり、履修期間を短縮できそうだという学生もいる。あるいはずっとこのようなオンラインだったら、学生を北海道内に限定する必要もないかもしれない。本専攻は全道一つに結んでいるが、その距離感も、いつもより縮まっている。もちろん、学校臨床心理専攻という性質から、全てオンライン授業が望ましいかどうかという議論はあるが、今回の事態は、専攻の新たな可能性を拓いたともいえる。

私自身は後期になって、あらかじめ課題を出し、それを集めたところから授業を展開するという「反転授業」形式を取り入れている。授業が終わってレポートを提出するのとは逆なので、「反転授業」と呼ばれるが、学生が資料を読み込み、既にいろいろ考えているところから始まるので、授業が深まる。これもオンライン授業に対しての工夫であった。それぞれの教員がさまざまな工夫を凝らし、それが功を奏しているようである。

学生たちは有職者が多く、大学まで来るのが大変なので、自宅でオンラインを希望する人も多い。後期に向けて、希望を取ったら、対面よりもオンラインを希望する学生が多かった。今後は、対面とオンラインをどう組み合わせ、学生により良い学びの場を提供するか。動き続ける情勢を鑑みつつ、どのように本専攻を発展させ、学生たちに良質の学びを提供するか。

COVID-19に振り回されるのではなく、COVID-19の作り出す状況を利用して、創造される持続可能な未来を紡ぎだしていきたい。